

第35期救助科を実施しました

- [期 間] 令和3年9月3日（金）から10月1日（金）まで
19日間（152時間） 宿泊
- [会 場] 埼玉県消防学校
- [到達目標] 救助に係る最新の専門知識及び専門的で高度な技能、技術を修得するとともに、基本活動要領を習熟することにより、救助活動及び救助訓練において自らの安全を確保できる技能を培う。また、厳しい条件下において、救助活動を遂行し得る旺盛な士気及び強健な身体を形成する。
- [教育対象] 救助業務に従事させようとする者で、初任教育修了者かつ採用後3年以上の消防経験を有する35歳以下の者
- [修了者] 26消防本部(局) 60名

講話(救助隊員の心構え)



救助員点検



体力向上運動



救助器具取扱訓練(三連はしご)



救助訓練(はしごクレーン救助訓練)



救急(救助現場における外傷処置訓練)



救助器具取扱訓練(主要な救助器具取扱訓練)



安全管理(火災時における安全管理)



総合訓練(火災想定訓練)



総合訓練(各種救助事象における想定訓練)



総合訓練(各種救助事象における想定訓練)



救助器具取扱訓練(高度救助用器具取扱訓練)



総合訓練(分隊活動効果確認)



総合訓練(夜間想定訓練)



修了しての感想

救助科のカリキュラムでは、救助に関する知識・技術はもちろんのこと、救助隊員としての精神力も合わせて鍛えることができました。どのような現場であろうと、要救助者を必ず助けるために、私達の心は熱く、頭は冷静にいななければならないと思います。

辛く苦しい時もありましたが、仲間とともに厳しい訓練を乗り越えられたからこそ、この経験はかけがえのないものであり、今後の消防人生に必ずや生かしていけると思います。

そして、この救助科に携わってくださいました、全ての方々に深く感謝致します。ありがとうございました。



後輩へのメッセージ

救助科での1日1日を無駄にすることなく、また失敗を恐れることなく、全力で訓練に臨んでください。どんな困難があろうと、周りにはそれを支えてくれる仲間がいます。仲間が困っている時は手を差し伸べてあげてください。

そして、この環境で訓練できることに對し、感謝の気持ちを持ち、学生全員で同じ目標に向かって歩いていってください。

修了しての感想

私は入校するにあたり、救助隊員としての基本的な技術はもちろんのこと、精神力・忍耐力を培い、埼玉県救助隊員の絆を深めることを目標に掲げておりました。

講義では救助隊員としての心構え、惨事ストレス、安全管理などを学び救助隊員として出場する現場がどれほど過酷でどれだけ多くの危険が潜んでいるのか、ストレスなどにより隊員へ目に見えない負担がかかっていることかを改めて学ぶことが出来ました。

実科の礼式訓練では、第35期60名全員で1つになることの難しさを痛感いたしました。救助訓練では、異なる所属の6名で構成された分隊内で活動するた



めの連携の大切さを学びました。

そして、入校前に掲げていた目標である精神力・忍耐力は、訓練中に教官、助教官の方々から叱咤激励を受けながら、また、自身で声を張り上げ、士気を保つことにより身に付けることが出来たと思います。

そして、なにより、19日間の過酷な訓練を共に乗り越えることが出来た仲間と絆を深めることも出来ました。

この救助科では19日間という短い期間ではありましたが多くのことを学ばせていただいたと思います。また、埼玉県消防学校第35期救助科第1小隊の副総代を務めさせていただき、貴重な経験をさせていただきありがとうございます。

後輩へのメッセージ

私が入校期間中に最も学ばせていただいたことは、「和衷共同」と「人命救助」です。

まず、1つ目の「和衷協同」は、心を同じくして共に力を合わせ、仕事や作業に当たることです。60名全員が同じ方向を向き、同じ歩幅で歩むことは簡単ではありませんでしたが、学生同士で声をかけあい、1つの目標に取り組み、日を増すごとにまとまりが出てきていることを実感できて、とても嬉しく思いました。

2つ目の「人命救助」は、要救助者の予後を考えて活動をすることです。救出さえ出来れば良いと、自分達の都合の良いことだけではなく、要救助者のことを第一に考えて、安静にかつ迅速に救助を行うための手技や気持ちを学びました。

学生全員がその気持ちを抱き、活動をすることにより「和衷協同」・「人命救助」に繋がると感じました。

私は、この救助科で、知識・技術はもちろんのこと、上で述べたような精神的な部分を学べたと思います。それは今後、救助隊員としてではなく消防職員である以上持ち続けなければならない部分だと感じました。

救助科はとても過酷で厳しい日々になると思いますが、得ることはとても多いです。そのためにも仲間の支えが必ず必要となってきます。自分のことだけでなく仲間と手を取り合い一つになり、皆で乗り越えてください。皆様のご活躍期待しております。

修了しての感想

第35期救助科は、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言下の感染拡大が懸念される状況の中、多くの方々からのご支援、ご協力により実現できたものです。また、教官、助教官からのご尽力とご配慮を賜り、学生が一人も欠けることなく、無事修了することができ、感謝しております。



本研修では、知識、技術だけでなく、共に厳しい訓練を乗り越えた仲間たちとの絆を深める中で、一人ではなく、全員で前へ進む大切さ、和衷協同を学ぶことができました。そして、「必ず救って、必ず帰る。」この言葉を胸に刻みこれからの消防人生を歩んでいきたいと思えます。

本研修に送り出して頂いた所属の方々、心身共に支えてくれた家族、厳しくも愛のある指導をしていただいた教官、助教官、19日間本当にありがとうございました。

後輩へのメッセージ

19日間という訓練期間は、非常に短いです。1日1日を大切に、そして全力で取り組むことが、この救助科ではとても重要になってきます。その日の訓練は、同じ仲間、同じ環境で2度と行うことができません。入校中、教官、助教官から厳しいご指導をいただき、落ち込んでしまう場面もあると思いますが、私たち学生のためを想ってのことです。そんな厳しいご指導をいただけるのも、この19日間しかありません。

この時間が非常に貴重であることを自覚し、教官、助教官、所属の方々、そして快く送り出してくれる家族、多くの方々からの支援と協力に感謝し、全力で取り組んで下さい。つらい時、苦しい時は否定的、消極的になってしまいますが、乗り越えた先には、その経験が糧となり自分の成長を実感できると思えます。頑張ってください。

修了しての感想

第35期救助科は、第34期と同様に新型コロナウイルス感染症の影響を受け、マスク着用での訓練・黙食・寮室の一人部屋など感染防止対策が徹底されていました。

前期との違いは季節で、9月という残暑が厳しい中、マスク着用での訓練は精神的に、また体力的にも、とても厳しいものがありました。しかし、救助科のスローガン「和衷協同・人命救助」へ向かい、60名全員が誰一人も欠けることなく無事に終わられたことを嬉しく思います。



日々の訓練では、教官・助教官の方々から多くの叱咤激励をいただき、私たち学生のために早朝から夜遅くまで準備をし、訓練環境を整えてくださったことに大変感謝しています。

今回学んだ「消防最後の砦」である救助隊の知識・技術・精神力を組織のために、そして地域住民のために役立てたいと考えています。

後輩へのメッセージ

19日間という期間は決して長くありません。研修が始まると、時間はすぐに過ぎていきます。「後悔先に立たず」ということわざがあり、「事前準備をしっかりしておくように」とも捉えられます。まさに救助科に相応しい言葉だと私は思います。限られた訓練時間に対し、全力で向かうためにも、これでもかというくらいに準備をし、万全の態勢で臨んでください。

救助科と一緒に汗を流して研修・訓練を乗り越えてきた仲間は一生の宝です。今後、大きな壁に直面した際に救助科の仲間を頼ることで乗り越えられると、私は確信しています。ぜひ、そのような消防人生の1ページにしてください。